
ぼくの辞書には正義の文字はない

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくの辞書には正義の文字はない

【Nコード】

N2810C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

王子は見合いをするために、隣国へと旅立つ。それに従うのは、女騎士。が、そこでふたりは事件に巻き込まれ インターネット創作文芸賞のファンタジー部門賞受賞作品。

極めて不快な一定のリズムで揺れている。

馬車は決して、快適とは言いがたかった。

「で、エルティアナ。この馬車はどこ行きかな？」

彼女の目の前に座る青年が、尊大に聞いてくる。明らかに皮肉だった。

「隣国　フェルキアです」

短く答えながら、エルティアナはしげしげと彼を見つめた。

まだ幼さの残る、少年から青年へとやっと成長を終えたあたりの年頃で、知らない者が見れば少女と見紛うことは間違いなさそうだ。やや伸び気味の茶色がかった金の髪が、腕のいい人形師が丹精こめて造ったかのような白くほっそりした顔に淡い影を落としていた。

碧玉さながらの大きな瞳は笑んでいるようでもあり、また、悪だくみをしているようでもあり。

「フェルキアね……それはいい」

口調とは裏腹に露骨に嫌そうな顔をし、彼は舌を出す。

「アルトさま」

諫めつつ、エルティアナは嘆息した。

このような、おおよそ王子らしくない　そう、一般庶民、下町の悪童のような青年が主だとは……。それがエルティアナの正直な気持ちだった。

「ふん、さすがは騎士さま、お厳しいことで」

「……王子！」

「分かってる。王子たるもの、気品を身につけねばならない、だろっ？　もう、朝から百回は聞いたよ」

白く華奢な手を大袈裟にひらひら振って、アルトは馬車の窓の外を指した。

もう既に、日は暮れようとしている　そんな頃合の太陽を。季

節は冬にさしかかったばかり、幾分短い昼の間に、百回も同じことを繰り返すのは、確かに多いかもしれなかった。

「私は……今朝方あなたの護衛に任せられたばかりです。その私に、そうまで言わせる貴方も貴方です」

「堅いねえ……。それでよく息がつまりまない」

「アルトさまは柔らか過ぎます」

少々きつい調子で言う。

王子にはきつく言うくらいでちょうどいいのだと、エルティアナは今日一日で存分に思い知った。

「外用の顔でいつもいたら……疲れるだろ？」

「普通はそんなもの、使い分けたりしません！」

「……ああ、そう。それよりか、王子さまを乗せるには不適合な馬車だよねえ」

と、アルトが全然聞いてないふうにはやくのを見、エルティアナはまたため息をつく。

そうして、決して豪華とは言えない内装を見まわした。座席は布張りだが、擦り切れかけているし、窓にはめ込まれた水晶はやや曇り、傷が目立った。なにより、狭い。

「確かに、王族に相応しい馬車とはいえないでしょう。けれどフェルキアでは、革命軍を名乗るものたちが野盗まがいのことを行っていると聞きます。そんなところへ、ひとめで王族と知れる馬車で乗りつければどうなるか　お分かりでしょう？」

「そんなところに、見合いに行かされるわけだ、ぼくは」
「……」

もう返す言葉もなく、ただ窓の外を見つめる。

雲に覆われていて、微かにしか太陽ののぞかない空。何倍にも水で薄めたインクを撒き散らしたかのような灰色をしていた。

地に目を移すと、黄土色の大地が広がっていて、背の低い草がところどころに生えている。それなのに木は一本もなかった。灌木さえもない。

不毛の大地　フェルキア。

魔女の破壊の爪痕の残る地。

窓に映る自分の姿を眺めてみる。

肌は不健康に見えるほどに白い。髪はくせがなく、淡い金の色。

瞳は薔薇の紅で、つり上がり気味だ。

エルティアナは軽く息を吐いた。

そんな国へと　アルトは厄介払いされようとしている……。

そう思うと、生意気なアルトも、強がっているだけのように見え
てくるから不思議だった。

アルトとエルティアナが通された部屋は、本当にこんなところで
貴賓を待たせるのかと疑いたくなるような部屋だった。

狭いというのに、無意味に彫像が置かれていたり、観葉植物があ
ったりするため、圧迫感を感じてしまう。

壁にかかっている風景画は、荒涼とした黄土がどこまでも続いて
いる様子を描いたもので、どうしても冷たい印象を受ける。

置かれたソファはひとつだけ、そのうえ座り心地は最悪だ。ソフ
アの前のテーブルは、叩けばひしゃげて壊れてしまいそうだった。

窓はない。どちらかといえば、誰かを閉じ込めておくのに適して
いそうだ。

「……まったく、いつまで待たせるつもりなんだか……」

アルトはかなり苛立っているように見えた。

細い眉を寄せている。親指の爪を噛むさまは、小さな子供のよう
だとエルティアナは思う。

何を言おうとも所詮は子供なのだ。自分よりも四つ下　たった
の、十七歳。王嬢と言つ温室で育てられ、外の空気の冷たさを知ら
ない花。それが、彼だと。守ってやらねばならない、弱々しく儂い
存在だと思った。

「仕方ないでしょう。今、ごたごたしているようですから」

穏やかに答える。王子の不安を感じ取れるような気がしたので。

「仮にも大事なひとり娘の見合い相手を　　こんなにおざなりに扱って」

壁の隙間から、薄汚れてやせ細ったねずみが這い出てきた。

アルトが玩具を見つけた幼子のような顔をするのが見えた。またとんでもないことを考えているに違いないが、表情は無邪気で、悪意など微塵も感じさせない。

そのままエルティアナはアルトの横顔を眺めた。いや、目が離せなくなつたと言う方が正しい。決して目をそらしてはいけないそんな気がした。

アルトの碧玉の瞳が、湿り気を帯びた、妖しげでもあり儂げでもある、憂愁のようなものの混じる輝きを宿した。

その輝きがねずみを射ると、まるで魔法にでもかかったかのようにねずみは静止してしまふ。

「……王子？」

アルトの瞳に揺らめく光は、美しくはあれどどこか普通ではない。そう、まるで伝説の魔女さながらに。

ねずみは恐れる様子もなくアルトに寄って来て、掌にのつた。前歯をこすり合わせるような声を上げる。従順に、自分は奴隷だとも言いたげに。

「王子！」

声を荒げ、エルティアナはアルトの肩を揺さぶつた。

答えずに視線を返してきたアルトは人ではない存在であるかのよくな印象を抱かせた。魂のない抜け殻に、神や精霊や　　そんなものをまとわりつかせたがごとき微笑みを浮かべている。

卵を握りつぶすように、アルトは手を握つた。

ねずみがうめきをあげて潰れる。

紅の毒々しい液体が握つた手の間から流れ、腕を伝う。そしてぼたり、ぼたりと床に落ちた。

手の白さが際立つ、などと一瞬、エルティアナはくだらないことを考えた。

「……………」

「どうかありませんでしたか？」

「別に、なんでもない」「

今はアルトはただの少年のようで、先程のような妖しげな雰囲気はない。

ねずみの死体を投げ捨てて、アルトは笑んだ。

「でも…………先程、あなたは……………」

普通ではなかった。

そう告げようとして、エルティアナは言葉を呑み込む。

主の事情に深く立ち入ることは許されない。

それに……………」

それに、訊ねようとした途端、アルトは重く暗い翳りをまとわりつかせて顔をふせてしまった。

「…………知らないかったんだ？」

エルティアナを見ようとさえせず。声音は心なしか震えているようにもあつた。

「何も……………」

「自らが仕える者について何も知らされていないんだね。盲目的に従うのは、賢い選択とは言えないね」

エルティアナが答えようとしたとき、ドアがノックされた。

「遅くなりまして申し訳ございません」

ドアの外から誰かが述べた。おそらく、使用人が何かだろうとエルティアナは見当をつけた。

「王女の準備が整いましたので、ご案内させていただきます。よろしいでしょうか？」

「…………参りましょう、王子」

立ちあがって姿勢を正し、アルトを促す。

「ああ」

暗い雰囲気を隠してアルトも立ちあがった。顔には優しげで、人懐っこい笑みが浮かんでいた。

案内された部屋は打って変わって豪華だった。

敷いてある赤い絨毯は毛足が長く、歩くごとに身体が沈むような錯覚をおぼえる。中央にテーブルがあり、挟んでふたつ、ソファが置いてある。見るだけで上物と知れるそれは、あまりにも高価そうでかえって嫌味に思えるほど。窓の両脇を飾る絨毯と同色のカーテンも、手織りの優れた品である。全身鎧の置物がそこにあるのが当然とも言うかのように堂々と立っていた。掃除も行き届いているらしく、ほこりっぽさなど感じられない。

「お初にお目にかかります」

アルトが目の中のソファに座るフェルキアの王と王女に会釈した。その後で席につく。

エルティアナもそれに習い、軽く会釈して隣にかける。本来ならば同席することなど許されぬ身だが、今回は特別だった。王子が何か問題をおこしたりしないように、見張らなければならぬ。

フェルキア王は威厳という言葉からは程遠い、小太りの男だった。上等な長衣ははちきれんばかり。瞳は濁り、健康ではなさそうな黒ずんだ顔をしていた。動くのも億劫なのではあるまいか。動作は緩慢であり、アルトの会釈に対しても横柄に頷いただけだった。

対して王女は小柄で いや、まだ幼いのだ。十五にも満たないだろう。王と比べれば段違いに気品があり、細い。癖のある黒髪を長く伸ばし、頭上に燦然と輝く銀のティアラが上品だ。意思の強そうなサファイア・ブルーの瞳に涼しげな目元、肌の色は真っ白で、真一文字に堅く引き結ばれた口元にも気品がある。白いシンプルなドレスがかえって美しさを際立たせている。

ただ……。

目の前の王女を密かに観察しながら、エルティアナは心の中でつぶやく。

十七歳の王子には、フェルキアの王女は幼過ぎるのではないだろうか。

「この度は、我が国までお越しくださいますて……ご足労をおかけいたしました」

王ではなく、王女の口から言葉が紡がれる。天性のものとも言うべき、凜とした声。細くとも、よく通り、そして澄んでいる。

「私がフェルキア王の娘、ルーティカです。以後、おみしりおきをその隣で王が頷くような動作をした。」

……立派な、王女だ。エルティアナはそう思う。あと数年もすれば、女王として相応しく成長することだろう。アルトには過ぎた人かもしれない。と不敬なことを考えて、慌ててそれを振り払う。

隣のアルトは確かに座つていればいかにも、といった感じはする。外見を差し引けば、雰囲気は間違いなく王族のもの。それは、着ている蒼絹の王家の正装のせいだけではないはずだ。

「デイディエル王家が長子、アルト＝カリエ＝デイディエルです。こちらこそ、どうかおみしりおきください」

たゆたう海のごとき微笑を浮かべ、アルト。いくら乗り気ではないとはいえ、こういうところはそつがない。

「……突然で申し訳ないのですが、アルト王子」
ルーティカが立ち、鋭い目つきでアルトを見た。

背は思いのほか低く、ソファに沈む王と比べてやや高い程度だ。「私は、あなたと結婚する気はありません。ひとりでこの国を守り行く所存です。失礼とは存じますが、明日お帰りくださいませ」

それだけ言うと、背を向けて退室してしまった。あまりにも自然、且つ優雅だったため、声をかける暇さえなかった。

「フェルキア王、これはどのような意味でしょうか？」
非礼とは知りつつも、エルティアナは口にした。

これは、デイディエル王家に喧嘩を売っているにも等しい行為な

のだ。

「いや……あれは、その……。娘が勝手に……」

しどろもどろ言い訳をされても、納得できるはずがない。

エルティアナをアルトが制した。

「……いいから」

耳打ちしてくる。

「ですが、王子」

「いいんだ」

哀しげにささやく声。エルティアナはまだ納得していなかったが、引き下がった。

「それでは、王。明日、帰らせていただきます。今晚泊まる部屋だけご提供いただけられないでしょうか」

アルトも立ち、エルティアナを促した。王を残して足早に退室した。

部屋の外にはメイドが控えていた。フェルキアの民の特徴である、黒髪だ。メイドは一礼して先に立って歩き出した。アルトとエルティアナは大人しくついていく。廊下の突き当たりにある螺旋階段を上り、城の右にそびえる先頭の中にある部屋に通された。エルティアナは、その隣の小さな部屋に泊まれということらしかった。

安っぽい薄っぺらな絨毯、そしてカーテン。中に置いてある家具はと言えば、小さなテーブルに固そうな椅子。それから、それと比べれば少しはましかもしれないベッド。もちろん、天蓋などついていない。灯りはランプがひとつだけ。

「それでは、おくつろぎくださいませ。食事は部屋までお運びいたしますので」

メイドはそのまま去り、後にはふたりだけが残された。

「また、ずいぶんと嫌われたなあ」

このような場所で、食事までも別とは。前代未聞だった。通例に従うならば、盛大な歓迎パーティを催すのが常だ。

「いかなさいますか？」

「一夜、留まるだけなら　ここでも充分だろうね。明日、朝一で発つ」

「はい」

エルティアナは恭しく礼をした。

「……ですが、これは、王族に対する処遇ではありませんね」

「これでも上等な方だろうね。絨毯が敷いてあるし。それに、見晴らしが良さそうだよ、あの窓。最上の客室だね。王女の権力がここまで強いなんて……フェルキアも長くはないなあ」

皮肉交じりのアルトの言葉を、このときばかりはエルティアナも聞き逃した。

「……………それにしても、この扱い！ 私には許せない……………！！」

デイディエル王家に対する侮辱です」

「仕方ないさ。地下牢に放りこまれたりしない分、いいと思わないとね。エルティアナ、ここはフェルキアなんだ、どこで誰が聞いているかわからない。そういう言葉は慎むべきだね」

「申し訳ありません……………下がります」

「ああ」

後ろにアルトの声を聞きながら、無礼とは知りつつも、エルティアナは振りかえらなかつた。

夜半も過ぎ、月が中天にかかる頃合い、エルティアナは眠ることもできず、ただ横になって天井を見つめていた。

エルティアナにあてがわれた部屋はさらに酷い。絨毯さえ敷いていない、剥き出しの石床。これでは囚人にも等しい扱いだ。鉄鎖につながれていないだけ、まだいいのではあるうが。

夜気は感覚を研ぎ澄ます。静謐なる空気に身体を馴らすことを、昔よくやらされたものだ。鋭敏な夜の感覚をいつであるうと行使できるようにするために。

隣室から微かな物音が響いた。

それは気のせいか、それとも神経質になっただけか……。けれどもアルトを放っておくわけにもいかず、寢床を抜け出、剣を手にとった。

手によく馴染む、鋭利な薄刃を備えた長剣。

鎧は音を立てぬため、あえて身につけなかった。

足音を忍ばせ、蝶番をきしませないように戸を押し開く。

松明さえなく、歩くにはいささか暗すぎる廊下を、壁に手をあてつつ行き、アルトの部屋の戸を見つけた。

中にアルト以外のものがいた場合を考えて、あえてノックはしない。

戸を引き、少しだけ開いて、隙間から身をすべり込ませる。

先ほど見たときとさほど変わらない様子の安っぽい部屋にひとつ、異質な存在があった。

夜着のまま窓のそばに立ち、伸び気味の茶色がかかった金髪を風に弄らせて、月を見つめるアルト。人ならざる者の雰囲気を感じ、妖精たちの王のごとき神秘的な姿をさらしていた。薄いシヨールを羽織ったのみだが、寒そうではなかった。

「……エルティアナ？」

物音に気付いたのか、アルトは振り返る。

「……？」

エルティアナは何も言わずにアルトを見つめた。正しくは、アルトの瞳を、だ。

月の影の下で見るからか、瞳は緑、蒼、金、銀　刻々と揺らぎ変化していた。

「不思議　だろうね。この瞳は」

言って、手を差し伸べてくる。

それを丁重に辞退して、エルティアナはアルトの隣に行った。

「聞きたい？」

アルトは唇の端を吊り上げる。屈託なく笑うよりも、アルトには

こういう顔の方がよく似合う。エルティアナは頷いた。普段ならば許されぬことではあると知りつつも。

「ぼくが城で密かに何て呼ばれてるか知ってる？」

「確か……」

エルティアナはためらう。答えてよいものかどうかと。

幼少の頃から言われ続けて来たのだろう。酷な言葉。先頃まで地方領主のもとで騎士見習をしていて、叙任されたばかりなため、エルティアナはディディエル王家について詳しくは知らない。停滞した時の中に在るかのような、田舎にいたものだから。

「気にしないから」

月を見上げ、何気ない様子でアルトがささやいた。

「魔女の子」

忌まわしく、汚らわしい言葉を口にする。“魔女の子”。魔女の伝説はエルティアナも知っていた。いや、全世界のものが、知っていた。

遙か昔より、幾度も世界を震えあがらせた強大なる邪悪。勇者に倒されても、数十年、数百年後には必ず甦る。だが、それも三百年前までの話。三百年前倒されたのを境に、魔女は現れなくなった。魔女が伝説と化して久しい。

御伽噺として、大人は子供に語り聞かせる。誰もが一度は耳にしたことがある話だった。

それなのに。

アルトをその恐ろしい“魔女の子”と、人は呼ぶ。ただのわがままな少年なのに。

「……それはある意味正しいんだ。真実なんだ。ぼくの中には、魔女がいる」

アルトはあっさりと肯定し、夜風に弄ばれる髪を手で押さえる。

細く、白い手だ。そう、まるで人間のものではないような……。

「魔女は三百年前から一度として現れていない。どうしてだと思っ
？」

「さあ……分かりません」

正直に言った。アルトの前では、偽りは無意味だと 身体の方が知っている。自分の勘をエルティアナは信じた。

「封印された。二度とは甦れないように、大地につなぎとめるのではなく 人の中に」

「どういうことですか？」

「大地に魔女を封じても、魔力は永遠には続かない。永い時を経て弱まった封印を破り、魔女は幾度も現れた」

淡々と感情を見せずにアルトは言った。自分のことではなく他人のことを話すような様子で。

「だったら、何故……。王子の中に……」

「魔女は瞳の中に封じられているんだよ。人の命も、久遠じゃない。代々、何度も何度も親から子へと魔女の封印は受け継がれてきたから……」

不思議な色の瞳が優しく光った。

「ぼくは母さんから封印を継いだ。魔女の力を、この瞳に。普通、魔術士は呪文がないと魔術を発動させられないけれど、ぼくはそんなものは必要じゃない。視線で魔術を扱うんだ、魔女の力のおかげでね」

エルティアナは何と言っているのかわからず、ただため息をついた。

「王族である以上、追いつけぬけにもいかなければ。王妃の子で王位継承権がないのをいいことに、政治に利用するつもりでいるんだ、国は」

「あなたは、それでいいのですか？」

「もう馴れたよ」

アルトは薄く微笑む。弱々しい。儂い感じがして、エルティアナは手を伸ばした。

頬に手を触れる。見た目のとおりに滑らかで、そうして 見た目に反して暖かった。

アルトはエルティアナの手をつかんで下ろさせる。

「今晚は冷える。もう、暖かくして眠るといいよ」

そう言い、シヨールをかけてくれた。薄い布の端を握り締め、エルティアナは暖かいと思った。

「おやすみ、エルティアナ」

「おやすみなさい、よい夢を……。アルトさま、ひとつ訊いてもよろしいですか？」

出ていこうとしたが、ふと足を止める。アルトが頷くのが気配でわかった。

「どうして月を眺めていらしたのですか？」

「……月は魔力を高めるんだ。満月の夜には、魔女が暴れて目が疼く」

「……では、私はこれで……」

部屋を出てから、シヨールの礼を言っていないことに気付いたが、その温もりが冷めぬまに眠ってしまいたくて、エルティアナはそのまま与えられた部屋に戻った。

目を覚ますと、既に陽は傾きかけていた。

「寝過ごした……」

ふと言ったから、気付く。確か昨日、王子は「朝一に発つ」と言っていたではないか。

「私を起こさないはずがない」

口に出してみるとそれは、正しいことのように思えてきた。

夜着を脱ぎ捨て、着慣れた綿のチュニックを着、特別にあつらえた厚手のびったりとしたズボンをはいた。その上から支給品の、胸元にディディエル王家の“竜と乙女”の紋章が彫り込まれた白銀の鎧を身につけた。長剣は下げて歩くため、ベルトに通す。皮手袋をはめ、踵にナイフの仕込んであるブーツをはく。

そうやっていつもの通りに身支度をすませ、そのまま髪を梳いた。見習いだった頃から、エルティアナはよく戦場に出ていた。野営をしているときには、鏡の前で髪を直すことさえもできない。だから、鎧を着、剣を帯び、皮手袋をはめたままでも大抵のことはできるようになった。

「私の身には 戦場の空気が染みついているのかな……」
そう、アルトには相応しくない空気が。

くだらないことを。

エルティアナは心の中で笑い飛ばす。とにかく今は、アルトのもとへ行かなければならなかった。

扉に手をかけて押すが、びくともしない。鍵はかかっていないよ
うなのに。

「何が……？」

嫌な予感がした。エルティアナはベッドの上に置いたままの、アルトのショールを握り締めた。

何かが起こっているのは間違いない。エルティアナはそう判断した。

戸に耳を当て、澄ますと、大勢の人間が走りまわる足音が遠くに聞こえた。

朝は大概、どこも忙しいものではあるが、明らかに変だ。喩えて言うなら、普段の朝の忙しさが早足で歩く貴婦人なら、今朝は走りまわる野盗 そんな感じだった。

隣のアルトの部屋側から、壁を叩く音がした。切羽詰まっている風でもなく、エルティアナはゆっくりとそちらへと行く。

「王子……ですね？ どうかなさいましたか？」

つとめて平静を装った。内心の動揺をアルトに気取られてはならない。護衛が取り乱しているのは、役に立たない

「今、外を走りまわっているのは革命軍だ」

「え？」

「早朝、革命が起こったんだよ。王はひとりで逃げ、王女だけが残

された。革命軍の人間はルーティカ王女を捜している　血眼にな
って」

どうして……

どうしてこの人は、何でも知っているのだろう。エルティアナは
ふと思う。ずっと部屋の中にいたのなら、知るはずもないのに。

「見てたんだよ。だから部屋の戸を開かなくしたんだ。みんな、殺
気立っていて危険だったから」

「そんなことができるのですか？」

見ていたことと、扉を開かなくしたこと。両方について訊ねた。

「外の様子は窓から見えたし、意識だけを分離して飛ばすこともで
きる。戸を開かなくするくらい、見習い魔術士だってできるさ」

意識だけを分離する。その言葉にエルティアナは身震いした。

「なんてことを！　危険です！」

「……大丈夫。ぼくの力は“魔女”の力　確かに制約も多いけれ
ど、不可能なことの方が少ないんだから」

「……それでも、やめてください……」

どうしてわかってくれないのだろう、王子は。

エルティアナはすがるようにして壁にもたれた。

「どうして？」

「じっ……護衛として、アルトさまの安全を守るのは私の」

「義務？」

アルトがエルティアナを遮り、続けた。エルティアナには彼の表
情は見えない。だが、哀しげな声音だと思った。

「あなたは……何でもお見通しなのですな」

言うてから、胸を押さえ、心の中で続ける。

違う。

違う……。

王子は何も知らない。きっと知らない。

もし知っているなら、危険を冒したりしないはず。

アルトに聞こえないように、エルティアナは声を殺して泣いた。

涙はとめどなく溢れ、止まらない。だが、声だけは、けしてもらさなかった……。

どれくらい時間がたったのか。

ずっとひとり、部屋の中にいて、おまけに感情が昂ぶっていたため、正確なことはわからない。が、だいたい昼過ぎくらいであろうとエルティアナは見当をつけた。

あれからアルトは話しかけて来ない。気配さえ感じられなかった。本当に隣室にいるのだろうか。

ふと、そんな考えがエルティアナの頭をよぎる。

それに、城内は静まり返っていた。走りまわるような足音はもう聞こえない。その代わり、外から歓声が聞こえてきていた。

ドアの蝶番がきしんだ。

「エルティアナ」

「アルトさま……。どうかなさいましたか？」

エルティアナは涙の痕跡が残っていないことに感謝した。

王家の正装ではなく、黒の長衣を纏ったアルトが扉を半分だけ開け、顔をのぞかせている。

黒いヴェールのついた帽子をかぶり　そう、まるで葬列に参加するもののような格好だった。

「いや。もう危険はないからさ。ぼくたちには」

「どういうことですか？」

「王はどこかへ逃亡。残った王女を革命軍が捕らえた。今から公開処刑が行われるんだ、城の中庭でね」

アルトはけして不真面目でなく、かといって真面目でもない。

「そんな……！」

エルティアナは声を上げた。

「処刑だなんて、酷すぎます！　あんな子供を」

「まあ、そつだろつね」

「アルトさまは　王子は平気なんですか!」

「まさか」

アルトの瞳が煌いた。

「助けに行くんだよ。何のために、ぼくがこんな格好したと思ってるんだい?」

薄汚れたマントを羽織り、長い金の髪をひとつに結った、旅人のような変装をして、エルティアナは人々の中に紛れ込んでいた。

辺りを見まわせば、大人もいるし子供もいる。男もいれば女もいた。エルティアナの隣にいる農夫らしき男は血のついた鍬を持っているし、娼婦のようなけばけばしい女は細いナイフを持っていた。足元の子供たちでさえ、果物ナイフで武装している。

皆、武器を携え、一様にみすばらしい服を着ている。

処刑を見に来た街の人々　いや、にわか革命軍の発する熱気が渦を巻いていてエルティアナは気分が悪くなってしまった。

中央にしつらえられた処刑台。赤黒く変色した方形の石の右隣、鉄鎖につながれて王女がいた。鎖の端を持つのは斧を手にした刑事の男。黒髪、黒目、そして黒いチュニツク。死神のようだ。

ルーティカは罪人のように鎖につながれていても、気高く毅然としていた。本当にこれでアルトよりも年下なのかと疑いたくなるほどに。

きつと、刑事の斧が振り下ろされる瞬間にさえ、恐れ戦くことはないのだろう。

エルティアナは懐から、アルトに渡された小石を出した。

掌中で転がしてみるが、それはやはりただの小石に見えた。事実、アルトもそう言っていた。

もう一度、頭の中で反復する。アルトから与えられた役割を。

ただ投げればいい。

致命傷を負わず必要はない。まあ、もともと無理ではあるが。人々の注意をほんの一瞬そらせばいいのだ。アルトが行動を起す隙を作りさえすれば。

石を握りしめ、そしてゆっくりと指を開いた。再び握り、必要最低限の動作で投げつける。

石は見事に刑事の額に当たった。傷はつかず、血も流れない。

刑事は額を押さえて小さくうめく。そして、人々の間には穏やかな水面に石を投じたときのようにざわめきが広まった。

そこへふうわりと、黒いものが降り立った。刑事と王女の間。

もちろん、黒の長衣を着込んだアルトだ。黒の衣に茶色がかつた金の髪は色鮮やかで映える。

「なっ……誰だ、お前は」

刑事はエルティアナの予想ほどには驚かなかった。それでも多少は動揺があるらしく、声がうわずっている。

「わからぬか？」

妖しく微笑し、アルトはマントを翻した。さして意味があるわけではないだろう。単に“それらしいから”やっているに違いない。

エルティアナは苦笑した。

幸い、アルトの出現のおかげで投石の犯人捜しは行われなかった。エルティアナは安堵のため息をつき、さりげなく後退した。

「まだわからぬと？ 魔女を継ぐ者を……わからぬと」

答えない刑事にアルトが教えてやった。

エルティアナはさらに後退し、群衆の中から抜け出した。一步離れたところに立ち、様子をうかがう。万一のことがあった場合に、すぐにも行動ができるように。

再度人々がざわめく。“魔女”という言葉はフェルキアではタブーだ。この地は、魔女によって不毛の大地へと変ぜられてしまったのだから。

「何のいたずらだ？ 子供が何を……」

刑吏が言いながら、アルトに手を伸ばした。ルーティカのつながれた鎖は、持ち替え、斧と同じ右の手で持っている。

「触れるな！」

アルトが叫んだ。

瞳が青緑色に輝き、目に見えない壁にでも当たったかのように刑吏の手は弾かれる。

「下賤なる者が触れることなど許されぬ」

口調を変えていて、雰囲気違った。エルティアナは舌を巻く。

とてもではないが、自分にはここまで“魔女らしく”振舞うことはできなかっただろうと。アルトが自らこの役目をやると言い出したわけが分かった気がした。

「アルト王子、何の真似ですか？」

今まで沈黙を保っていたルーティカが花びらのような唇を開いた。

「言ったであろう。魔女を継ぐ者である、と。この国を再び焦土と化すために来た」

狂気を帯びたアルトの哄笑が風に乗って流れる。

「お前を殺そうとした者から消してやろう。感謝せよ」

民衆の間に混乱が生じた。

これまで“狩る者”であったのが、一気に“狩られる者”になったのだ。それは当然のことと言える。さすがに逃げ出すものこそいなかったが、何がしかのきっかけさえあれば、間違いなく全員が散り散りに去ると思われた。

「そのようなこと……許しません！」

噛みつくようにルーティカ。

「何をためらうことがある？ お前を斬首しようとしていた者たちを、かばう理由がどこにある？」

長衣のゆつたりとしたそでからのぞく白い指先が、ルーティカの頬を撫でた。アルトの指のはずが、何か他の生物のように見え、エルティアナは二度まばたきした。

「フェルキアは私の国です。そしてフェルキアに暮らす民は、私の

愛する者たちです。傷つけることなど許しません」

つながれていても いやつながれているからこそ、ルーティカは神々しかった。

「愚かな。命を賭してまで守るに値するものたちか？ フェルキアの民は」

嘲るようなアルトの態度は、演技とは思えない。まさか本気ではないかと、一瞬疑ってしまう。だが、エルティアナはすぐに思いなおした。そんなはずがない。誰が知らなくとも、エルティアナは知っている。昨晚のアルトこそが本当のアルトなのだ。

「……国王の娘として生まれた以上、それが私の宿命です。覚悟はできています」

拍手を贈りたくなかった。たとえ今は幼くとも、近い将来にルーティカが治める国ならば、世界のどこよりも豊かな国になるに違いない。たとえ、不毛の地にあつたとしても。

「愚か者め」

アルトが嘲笑を浴びせた。

「この国を守るならば、愚者で構いません」

ルーティカに女神を見た気がした。

全ての運命を統べる、唯一の女神の姿を。エルティアナは目をしばたいた。

一步、ルーティカが踏み出すと、鎖が違いに当たって軽やかな音を立てる。

「殺すなら、私を殺しなさい」

「お前を？ お前のような小娘をか？」

アルトの衣が生き物のように蠢き、さわり、とルーティカの頬を撫でた。

邪悪な、本物の魔女のごとき微笑をたたえたアルトが口を開く。

「お前の命ひとつ奪ったところで、どうなる。それよりも動けぬお前の目の前で、フェルキアを灰にしてやった方が面白い」

「やめなさい！」

ルーティカの叫び。

それは空気を揺らす波ではなく、目に見えない、だが確実に全てに影響を与える呪だった。

心までもが震えるような。

切なさを秘めていた。

アルトは何かを見つけたらしく、わざとらしく目を細めて見せる。視線の先には小さな子供がいる。ルーティカよりもかなり年少で、ひとりではその場に存在することさえも危うそうな幼女。何が起きているかさえ、わかっていないに違いない。純真で穢れと言うものを知らぬ子供。きよとんとアルトを見つめかえしていた。

「あの童をこの場で屠ってもいい。ちょうどいい贄だとは思わぬか？」

残虐な血の彩りこそ魔女には相応しい。

そうとでも言いたげに、アルトはルーティカを高圧的に見下ろした。

それを見、エルティアナは身震いする。

本当に、あれは演技なのか？

疑惑が頭をもたげる。

だが、それを慌てて振り払う。違う。アルトは、きっと違う。そう信じたかった。いや、そう信じようと思った。

「あんな……子供を！」

王女の顔が憤怒に歪む。幼さを消し、ただ国と民草を愛する為政者としての顔をのぞかせる。

「贄は昔から穢れなき者と定められている」

「何へ贄を捧げるのです？」

「魔女への贄に決まっています。久方ぶりの復活を祝う贄よ……」

幼女から視線をはずさずに答えたアルトの瞳を見、エルティアナは彼の言葉がただの偽りだと知った。瞳の色は違えども、内なる輝きは変わらない。アルトのまま。

アルトは胸の前で右手の指を一本ずつ曲げていった。ゆっくりと、

ゆっくりと。

またその指を時間をかけて開く。

掌をアルトが一瞥すると、爪が瞬時に伸び、刃と化した。鋼質のそれを互いにぶつけさせる。金属のこすれ合う嫌な音がした。

ルーティカを左手で押しつけ、アルトは子供に向かって爪を振りかざす。

「やめて！」

割って入ったルーティカの肩に、爪が食い込む。薄青のドレスに血がにじみ、広がる。咲きほころぶ寸前の紅を凝縮した薔薇のような色の液体が布の青を侵食していった。

広がり具合から見ても、傷は浅い。ルーティカの行動を予想したアルトが加減したに違いない。

ルーティカの顔が苦痛に歪むことはない。

傷を負った痛みを感じていないはずがなかった。それでも表情を変えないのは、王女としての誇りだろう。これしきのことと苦悶の表情を見せるような真似を、一国の王女としてルーティカが潔しとするはずがない、とエルティアナは思う。

「自ら傷を負ってまで、価値なき者を救くるか、愚かな姫よ」

アルトには答えず、ルーティカは肩越しに後ろの幼女を見遣った。エルティアナのいる場所からでも、何とか幼女は見えた。怖がって泣きじゃくっているのだろう、肩を震わせていた。

「価値なき者などではありません。フェルキアの民である限り、私の命よりも遥かに重いのです」

「……偽善者めが」

ルーティカの心を知ったのか、人々の間にざわめきが走る。今はこのようなことをしている場合ではない、という声があちらこちらからもれていた。

まず、行動を起こしたのは刑吏だった。

背後からアルトに斧を振り下ろす。

振り向きざま、アルトがひと睨みしただけで、刑吏は動かなくな

った。

死んではいない。だが、動かない。

そのままの、斧を振り下ろそうとした格好で。

「下賤なる者よ、その程度で魔女の後継を損なうことなどできはしない」

アルトは含み笑いをもたず。

続いて処刑台を囲む輪の最前列にいた者たちが。

まるで示し合わせたかのように、いつせいにアルトに飛びかかる。

「愚か者」

アルトが物憂げに首を巡らす。

光の壁がアルトを囲み、守った。

飛びかかった者たちは弾かれ、落ちる。

エルティアナはアルトの予定通りの結果が導かれたことを知った。

「ルーティカ王女……お逃げ下さい……！」

地面に這いつくばった男が叫んだ。叫びと言つには、少々かすれ過ぎてはいたが。

「王女……！」

口々にルーティカを促す。

それなのにルーティカは首を横に振った。強く輝く瞳でアルトを睨みつけている。退く様子は少しもなかった。

ルーティカはドレスの左そでに手を入れる。スツと引き出した右手には、薄刃の短剣が握られていた。どうやら、そでに短剣が仕込まれていたようだ。

何も言わず、アルトに向けて短剣を構える。ルーティカの手は震えていた。

「そんな短剣ひとつで何を？」

ルーティカは答えない。

唐突に走り出し、短剣を前にしてアルトに体ごとぶつかっていった。

アルトはわずかに体をひねる。

短剣は左腕に突き刺さった。

「小賢しい……」

右手でルーティカを振り払い、アルトは短剣の刺さった部分を一瞥した。

払われた反動でルーティカはしりもちをつく。

アルトは短剣を抜き、ルーティカの前に放った。血が流れ、長衣のゆったりしたそでに染みが広がる。

軽い音を立てて短剣が落ちる。刃に赤黒い液体が付着していた。

「だが、気に入った。愚かなる娘よ、お前に免じてこの国を滅すは最後まで待とうぞ……」

地を蹴り、空へと舞い上がる。羽根のように。

そして、空気に溶け込むように、輪郭が薄れて消えた。

「ルーティカさま！」

「ルーティカ女王！」

民衆がルーティカにつめかけた。

歓声を上げながら。

これでもう、ルーティカは英雄だ……。

エルティアナは目を細め、静かにその場を去った。アルトとの待ち合わせの場所に向かうために。

街の出口に近い辺り、一本だけ大きな木がある。フェルキアには珍しい、緑の葉が繁る木。

大人ふたりが腕を広げてやっと囲めるほどの太さの幹に、アルトが左腕を押さえて寄りかかっていた。

魔女の倒された場所に記念として植えられた木。そこにアルトが寄りかかるのは、何だか奇妙で不似合いに見えた。エルティアナは薄く笑う。

「アルトさま！」

ルーティカの処刑を見に、人々は出払っている。だから多少、大声を出しても問題はなかった。

駆け寄る。

エルティアナは疲れた様子のアルトを抱き起こした。

「やった……。成功」

アルトが親指を立てる。口調はアルトそのものなのだが、息も絶え絶えといった感じで。

「どうなさったんですか……？」

不安を抱きつつ訊ねた。アルトを抱く手にも力が入る。そのまま消えてしまいそうだったので。

「いや、ちよつと……。さすがに……。空間を、渡るのは、消耗するんだ……」

「アルトさま、まさかあれは本当に！」

空間を渡ったと言うのか。

普通の人間では体に負担がかかり過ぎ、死に至るという術だと言うのに。

「そうじゃないと、“魔女らしく”去れなかった……。それに、追つて、来られたら、大変だから……」

ぐったりとしている。アルトはエルティアナの為すがまま、自ら動こうとはしなかった。単に動けないという方が正しいのかも知れないが。

「何て……。無茶を！」

ただ、それだけのために。そんなことのために……！

こらえようとは思ったものの、やはり無理だった。エルティアナは頬が熱を持つのを自覚した。

涙が、こぼれる。

頬を伝ってぽたぽたと、落ちた。

誰にも泣き顔は見せたことがなかったというのに。

そうは思っても、涙は溢れて止まらなかった。

どうして泣いているのか、と問われても、きつと答えられないだ

ろっ。そんな、涙。

「……泣いて、る……？」

見上げてきたアルトと目が合った。

エルティアナは慌てて目をそらし、片手で顔を覆う。

「泣いてませんっ！」

強がりと言ってみる。

エルティアナは王子の“護衛”の騎士だから。主君にこんな顔は見せられないと思った。それに……

身分違いとは分かっていたけれど、“女として”こんな顔は見られなくなかった。

「強がり」

アルトが自らエルティアナの腕を求めてくる。

「……少し、……疲れた。休ませて……」

「ええ……いくらでも」

すがつてくるアルトを抱きとめ、エルティアナはささやいた。

「けれど、アルトさま……。あんなやり方では、かえって憎まれるだけですよ……」

どんなにいいことをしても、真意が理解されることはないだろうに。エルティアナはアルトの耳元に唇を寄せた。今のアルトに大声は、頭に響いて辛いだろうから。

「感謝、されたくて、してるわけじゃ、ない……」

「あなたは……」

本当は優しいのですね。優し過ぎるのですね。

言いかけてエルティアナは言葉を呑み込んだ。アルトはこんな言葉は望んでいないような気がした。

エルティアナは空を仰いで首を振り、またアルトに視線を戻す。

「私の主です……。あなたに任せます。これからはずっと、私の主君はあなただけです」

かわりに出た言葉も心で感じたままのことだった。

アルトは弱々しく頷き、力なく笑う。

「でも、エルティアナ……。ぼくの、辞書にはね……。正義の、文字は、ないんだよ……?」

きつと精一杯の強がりなのだろう。アルトの仕草が微笑ましく、エルティアナもつられて笑った。

「構いません。構わないんです」

エルティアナは涙声で言いながら、再び空を仰いだ。これ以上、涙がこぼれないように

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2810c/>

ぼくの辞書には正義の文字はない

2010年10月8日15時53分発行